

陰影景観の固有性に関する研究
—景観表現に現れる日本の陰影空間—

Peculiarity of Shadow Space in Japan
— Analysis of Ineiraisan and Modern Poetry —

川崎 雅史*・堀 秀行**

By Masashi KAWASAKI, Hideyuki HORI

In this paper we tried to draw a framework and conceptual model about shadow and shadow space in landscape to give new design vocabularies to urban design works.

These subjects are studied by following methods.

1. We interpretate the conceptual meaning of shadow space by referring sentences and words in famous essay "Ineiraisan" to real traditional space.
2. We abstract characteristic representatives about shadow and shadow space from modern Japanese poetries and classify the basic form of shadow space emerged in Japanese literary works.

1. はじめに

(1) 陰影景観の分析

景観に必然的に付随する陰影は、景観の本質的な部分ではなく随伴的なものであるにもかかわらず、その景観の印象的な高まりや奥行きを増すことが指摘されている。これまで、建築の日影規制や照明計画を対象とした環境工学などの分野で、陰影の物理的側面を計測し、日影図や日影時間図を使って設計基準を考慮したり、採光・照明の機能的配置に関する議論が行われてきた¹⁾。また、CG (コンピュータグラフィックス) の分野では、影づけ (シャドゥイング) や陰づけ (シェーディング) といった面の立体感や空間的な位置関係を表現する映像化技法が確立している²⁾。

本研究は、このような陰影の物理的側面とは別の見方、すなわち人が景観を鑑賞するという景観論的な視点を基礎として、陰影が現象として成立している景観を陰影景観と定義し、その概念の基本的な整理とその固有性を把握するものである。陰影が人々にどのような意識を働きかけるのか、また人々は陰影に何を見い出そうとしたのかを評論や詩などの言語的なメディアの分析によって明らかにしたい。現象面のみを見れば、陰影は全体景観の中の一要素であり単純に分離することは不可能である。しかし、その景観の中で陰影が景観主対象として意識された折にその意識の領域内で成立することから、陰影景観と定義した。また、陰影景観は、実際の景観主体の純化された一つの表現モデルとも考えられ、これを評価分析することは逆に実際景観の評価に還元されられると思われる。

(2) イメージの影

本研究の課題意識の背景の一つに、人の深層的な

* 正会員 工修 京都大学助手 工学部交通土木工学科
(〒606 京都市左京区吉田本町)

** 学生員 京都大学大学院修士課程
交通土木工学専攻

心理の中の影の問題がある。ユング心理学では、「個人が何らかの理由で記憶に取り戻すことが不快なため、忘却の淵においやられた心的内容の集合、そして、意識の一面を補償する心の作用によって、無意識の中に対極的に生じて意識には上らないある感情的まとまり」をコンプレックスと呼ぶ³⁾。そして、個人が意識的に行動する場合に、自分にできなかった行動や行動しなかった部分に対する思いが、シャドー（影）として無意識層に配置される^{4) 5) 6)}。

人の景観体験においても、この仮説を拡張すれば、自分の体験できなかった希望行動を景観に投影し、それを美意識や連想意識へ転化させることで、コンプレックスとシャドーを補償することが考えられる。中村・平田における仮想的な行動期待の仮説「風景とは人間の仮想的行動期待を象徴的に表現している」⁷⁾にも類似した心理現象の指摘が考えられる。陰影は特に文学や絵画の中で象徴的な表現として記述され、そこには芸術家の影の心理を芸術的な意味へ転化した心象の跡が見受けられる。本研究は、この仮説に基づいて言語的メディアを分析対象としており、考察の背景として考慮したい。

(3) 研究の目的

本研究は、陰影景観の固有性を記述する一つの方法として、言語的なメディアの分析を通じて、日本的な陰影空間とその構成要素や演出を把握することを目的とする。初めに、研究全体を通じての景観論的な視点を設定するため、陰影景観の構成と基本類型の定義を行なう。次に、その視点を基に文芸評論「陰翳礼讃」と現代詩の表現に現れた陰影空間を分析し、日本的な陰影空間のサンプルの抽出とその景観論的な構成要素や演出方法について整理を行った。

2. 陰影景観の基本構成

(1) 陰影景観の基本構成

人が景観を鑑賞するという景観論的な考え方から、研究の基本視点となる陰影景観の基本的な構成を景観把握モデル⁸⁾として図1で定義する。

- ①光源 : 太陽、月、照明
- ②主体 : 陰影の輪郭を作る光の被写対象物
- ③スクリーン : 陰影の映る被写体
- ④陰影 : 陰影の視覚現象

⑤視点場 : 陰影景観の鑑賞場

また、構成要素を以上の5つに仮定すると、陰影景観は、これらの要素の変化要因（季節・時間による光源の変化、主体の移動変化、被写体の反射・屈折、視点場の見え）の組合せの中で、総合的な現象として成立していると考えられる。

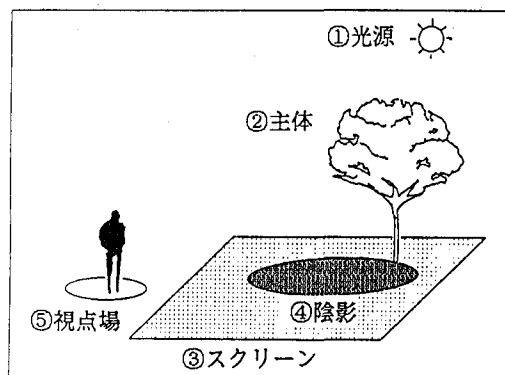


図1 陰影景観の基本構成

(2) 陰影景観の基本類型

大國語辞典⁹⁾に示されている「かげ」の辞書的意味から比喩的な意味を除き、陰影景観の現象に置き換えると、次のような基本類型が得られる。これを図2に示す。

- ①「光どり」; 地(スクリーン)が闇で、日・月・灯火などの光によって明るく浮く部分
- ②「影どり」; 物体が光を遮って、後方にできる暗い部分
- ③「陰・蔭」; ものに覆われた薄ぐらい背面・後方の場所
- ④「鏡映り」; 鏡のように水面に映る部分

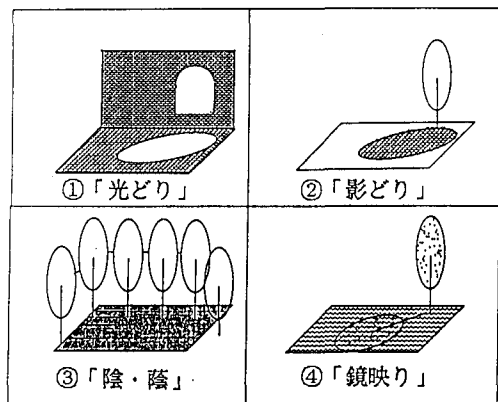


図2 陰影景観の基本タイプ

3. 日本の伝統的空間に現れる陰影

—谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」を対象として—

(1) 日本の気候風土と陰影

日本は、宮川が指摘するように、年間を通じて降雨量が多いために、湿気を多量に含んだ空気中を通る太陽光線は、欧州と比較して強くもなく弱くもない「程よい日照」である¹⁰⁾。また、日照時間も長く、冬も暖かく明るい日が続く。このような気候的風土の中で、日本の伝統的建築では、基本的には、自然との結び付きを失うことのない開放的な空間が発達し、その中で「外光」を光源として取り入れることのできる仮設的な工夫、すなわち軒の出、庇、簾、障子、明り窓等が発達した。

「暗い部屋に住むことを余儀なくされたわれわれの祖先は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至った。」この「陰翳礼讃」¹¹⁾の一節には、日本の伝統的建築は、気候風土や建築材料等の理由から、庇を深くしている所に大きな特徴があり、いつしか陰影のうちに美を発見し、陰影を利用する精神的な基盤があったことを述べている。そこで、本章では、陰影に対する評論として評価の高い「陰翳礼讃」（谷崎潤一郎）を手がかりとして、日本的な陰影空間の典型に対して、前章で述べた基本構成を基礎とした景観論的な視点からの整理を行った。

(2) 日本の伝統空間における陰影美の演出方法

陰翳礼讃の中で指摘される具体的な陰影表現を参照すると、基本構成要素の光源（採光）、スクリーン、主体とスクリーンの関係、陰影に関しての演出方法が記述されている。これらを更に細かく対象例に沿って整理すると、次のように記述できる。そのタイプ名・概要・対象と表現例を以下に示す。

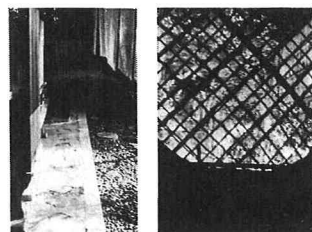
①光源・採光の演出

(a)薄明りの安寧（採光の演出）

「陰的な視点場における薄明りの情緒性、心理的な安定」を示す。敷地の裏や奥にある人目のつかない陰的な空間に窓を設け、庭の景色への視点場とし、薄明りの光（障子を通した自然光）によって情緒的な連想の中へ引き込み、心理的な安定効果を引き出そうとする演出である。

・対象例 <厠>

「必ず母屋から離れて、青葉の匂や苔の匂のして来るような植え込みの蔭に設けてあり、廊下を伝わって行く・・・ほんのり明るい障子の反射を受けながら瞑想に耽けり、または窓外の庭の景色を眺める。」



写-1 厠

(b)朦朧たる限（採光周辺の部分的影による演出）

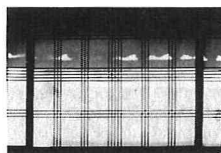
「採光周辺における明暗の境のつかない朦朧たる限」を示す。虚無の空間に対し朦朧たる限を生むようにしそれにより生じる陰翳の世界に幽玄味を演出する。

・対象例 <書院の障子>

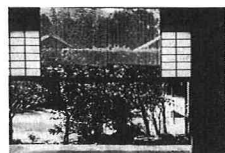
「縦繁の障子の棧のひとコマごとに出来ている限が、あたかも塵が溜まったように、永久に紙に沁み着いて動かないのかと訝まれる。・・・ほのじろい紙の反射が、床の間の濃い闇を追い払うには力が足らず、かえって闇に弾ね返されながら、明暗の区別のつかぬ昏迷の世界を現じつつあるからである。」

・対象例 <床の間>

「唯清楚な木材と清楚な壁とを以て一つの凹んだ空間を仕切り、そこへ引き入れられた光線が凹みの此処彼処へ朦朧たる限を生むようにする。」



写-2 障子模様



写-3 書院の障子

②スクリーンの演出

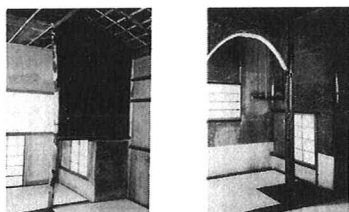
(c)柔弱な光の軌跡（被写体の吸収的素材による演出）

「柔弱な光と柔らかいスクリーンによる繊細美」を示す。軒や障子を通した力のない柔弱な光が、座敷の弱い色の反射率の少ないスクリーンにとりついて、なんとかその軌跡を残している繊細な陰影美を演出する。

・対象例 <砂壁>

「座敷の美の要素は、この間接の鈍い光線に外ならない。・・・力のない、わびしい、果敢ない光線が、

しんみり落ちついて座敷の壁へ沁み込むように、わざと調子の弱い色の砂壁を塗る。」



写-4 茶室の砂壁

(d)陰の中のゆらめき（被写体の反射的素材の演出）
「陰の中で輝くスクリーンに映るゆらめきの光」を示す。日常生活物品が、陰の中では、効果的なスクリーンとなって、変化のある蠟燭や灯明の光をより強調して映す神秘的な陰影の美を演出する。

・対象例 <漆器>

「あのピカピカ光る肌のつやも、暗い所に置いてみると、それがともし火の穂のゆらめきを映し、静かな部屋にもおりおり風のおとずれのあることを教えて、そぞろに人を遐想に誘い込む。」



写-5 燈燭台

(e)金箔地の照明（被写体の反射的素材による演出）
「金箔地による全体照明」を示す。わずかな灯具の光を金箔地による反射によって全体照明に変え、人工光をも自然光に近づける工夫をし、薄命の世界を演出する。

・対象例<金襴・金屏風>

「その照り返しは、夕暮れの地平線のように、あたりの闇へ実に弱々しい金色の明りを投げているのであるが、私は黄金というものがあるときほど沈痛な美しさを見せる時はないと思う。」



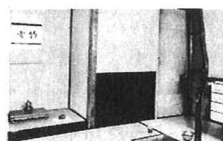
写-6 金襴

③主体とスクリーンの関係

(f)床うつり（景観要素の陰影との調和による演出）
「床うつりにより引き立つ軸物と座敷」を示す。景観要素（軸物、飾り花）の持つ古色と床の間の暗さの調和、すなわち床うつりが良ければ、軸物と座敷の相互的な視覚効果を演出する。

・対象例 <掛け軸・飾り花>

「座敷にも床の間というものがあって、掛け軸を飾り花を活けるが、しかしそれらの軸や花もそれ自体が装飾の役をしているよりも、陰翳に深みを添える方が主になっている。」



写-7 茶室



写-8 書院

④陰影による強調

(g)隠しと強調（周囲のぼかしによる演出）

「醜いものを隠し美しいものを強調する」ことを示す。コントラストによって地と図を作り出し、主対象を強調する。

・対象例 <歌舞伎>

「昔の女形でも今日のような明煌々たる舞台に立たせれば、男性的なトゲトゲしい線が眼立つに違いないのが、昔は暗さがそれを適当におおい隠す」

・対象例 <文楽（人形）>

「長い袂や長い裳袖で手足を隈の中に包み、或る一箇所、首だけを際立たせるようにしたのである。」

4. 現代詩に現れる陰影景観の分析

前章では、日本の伝統的空間に現れる陰影の美の演出を景観論的な視点から整理した。本章も同様に、日本的な陰影景観の典型を現代詩から抽出し、主体やスクリーンなどの景観の構成と陰影に投影された詩人の心象を考察する。これは日本の陰影が文学の中でどのような扱いを受けてきたのかを手がかりとしてその固有性を把握することを目的とする。

（1）対象現代詩と整理手順

①現代詩の選択

伊藤¹²⁾によると、現代詩は、明治の近代詩が生まれてからそれまでの音楽的で情緒的であった作品に対して、ずっと内面的に複雑化しており、生活意識の多様性を投影するようになっている。このような複雑な生活意識の流れの中には先述した心理的な影が潜在しており、自由な表現形態をとる現代詩に多く表現されると考えられることから分析対象とした。

②分析対象詩の選定

分析対象となる現代詩のサンプルは、代表的詩人の成果を集約したもので作品のテーマが明確に記述されていることを考慮し、伊藤による文献¹⁾を用いた。これより、対象詩は明治から昭和初期までの21詩人による250篇を対象とした。

③陰影表現の整理手順

対象詩から陰影に関する表現を、次の手順にそって抽出して整理した。

STEP1 対象詩の陰影表現のある箇所を抽出する。

STEP2 陰影の基本構成である主体、スクリーン、基本タイプ（光どり、影どり、陰、鏡映り）、季節・時間に該当する表現を特定し、その頻度を整理する。

STEP3 作品評論をもとに、詩のテーマをマクロな視点から分類し、陰影描写に投影された心象内容を整理する。

（2）現代詩に表現される陰影の特徴

表現抽出の結果、250篇中、30篇（12%）の現代詩が陰影表現を有した。先の整理手順に基づく結果の一覧を表1に示した。次に頻度集計の結果から、現代詩に現れる陰影の特徴を述べる。

①基本タイプの出現頻度

抽出された陰影のシーン表現に関して、第1章で定義した基本タイプの出現頻度の割合を表2に整理した。この結果では、「影どり」と「陰」のタイプの出現割合が両方ともほぼ同じ割合で非常に高く、約80%を占める。文学的な表現の中にも、日本の気候風土の特徴から生じる輪郭線の明確でない「陰」のタイプが多く現れていることがわかる。

また、対象詩のテーマを伊藤の評論を参照しマクロに判断すると、希望、不安からの脱却などのポジティブなテーマ、社会的な不安や自己の危機感などの暗鬱でネガティブなテーマ、追憶の中の風景描写や自己想念の世界など静的で感情の直接表現を抑えたニュートラルなテーマを扱った作品の3つに分類される。抽出された陰影表現に関連する現代詩のテーマの分類を表3に示し、主題と構成タイプを表4に示した。

表2 陰影景観の基本タイプの出現割合

①「光どり」	4	シーン（13%）	／30作品
②「影どり」	13	シーン（43%）	／30作品
③「陰」	10	シーン（33%）	／30作品
④「鏡映り」	6	シーン（20%）	／30作品

表1 現代詩に現れる陰影表現（分析結果一覧）

No	題名	作者	主体	スクリーン	タイプ	季節・時間	テーマ・描写
1	小詩	島崎藤村	花	泉	鏡映り	－・－・－	恋・生命の躍動
2	狐のわざ	島崎藤村	影どり	庭	影どり	秋・夜・－	恋・新しい時代の情操
3	草枕	島崎藤村	山	谷	陰	秋・夕・曇	青春・精神の漂白と暗鬱
4	草枕	島崎藤村	－	荒野	陰	冬・夕・曇	希望・暗鬱からの脱却と希望
5	朝な夜	蒲原有明	白壁・人	川面	鏡映り	－・朝・－	心象風景・川岸を流れゆく風景
6	魂の夜	蒲原有明	銀行	道	影どり・陰	冬・夕・－	生活・商人の負債と囚われの意識
7	君や我や	星	鏡	陰	鏡映り	－・夕・－	恋・瞳に映る星空の美意識
8	敵	北原白秋	酒倉	川面	鏡映り	－・夕・－	心象風景・幼年時の生家の追憶
9	糸車	北原白秋	川岸	戸棚のガラス	鏡映り	－・夕・月光	風景写真・柳川の風景
10	時は逝く	北原白秋	穀倉	川面	鏡映り	春・夕・－	心象風景・時のうつろい
11	月光微顔	北原白秋	笹の葉	花（木槿）	影どり	－・夜・月光	風景写真・幽玄の情緒
12	レモン歌	高村光太郎	花（桜）	道	影どり	－・－・－	哀しみ・死者への追悼
13	秋ぐち	山村暮鳥	人	道	影どり	秋・夕・－	生活・貧しさと寂寥
14	象	室生犀星	－	陶器の底	陰	秋・夕・－	心象風景・わびしさと虚無
15	駱駝	室生犀星	－	駱駝小屋	陰	冬・－・－	老いと死・純重で灰色の想念
16	群衆の中	萩原朔太郎	建物	道	影どり	春・夕・－	孤独・都市の群衆の孤独
17	蒼ざめた馬	萩原朔太郎	馬	－	影どり	冬・－・曇	風景写真・宿命と虚無
18	思想は一つの意匠であるか	萩原朔太郎	仏	－	光どり	－・夜・月光	仏の加護・明るく密やかな加護
19	或る夕暮	千家元庵	－	道の凹凸	光どり・陰	春・夕・－	風景写真・地面に白く浮かぶ光
20	ためいき	佐藤春夫	花	椎の木の下	光どり・陰	5月・昼・－	風景写真・光と陰のコントラスト
21	雨ニモマケズ	宮沢賢治	松の木の下	－	陰	－・－・－	生活・誠実な人間の隠遁場所
22	春と修羅	宮沢賢治	山	山	影どり	春・夕・－	季節の訪れ・雄大な山間風景
23	平陸地損定	宮沢賢治	－	林	陰	－・日向・－	風景写真・昆虫や植物の生息する場所
24	日の哀歌	尾崎喜八	－	雄木山	光どり	春・夕・－	心象風景・田舎の風景と沈静的な思念
25	日の暮	尾崎喜八	森	枯草の路	陰	冬・夕・－	風景写真・田舎の森の日常的風景
26	湖畔	金子光晴	雪	山	影どり	冬・－・－	自然の輝き・戦争からの脱却と希望
27	頬白	三好達治	鳥（頬白）	雪	影どり	冬・夕・－	心象風景・わびしい薄暮の影
28	北見の海岸	中野重治	漁師	渚	影どり	－・昼・－	生活・漁師の働く姿
29	雨の降る品川駅	中野重治	帰国者	改札口	影どり	冬・夕・雨	別れ・駅の風景
30	上小川村	草野心平	手拭	障子	影どり	冬・－・－	生活・村の日常生活

表3 陰影表現の現れた対象現代詩の主題

主題分類	作品数	主 題
ポジティブな主題	27%(8)	恋・情操(3), 自然の輝き, 希望 隠遁生活, 季節の訪れ, 加護
ネガティブな主題	27%(8)	社会的 葛藤 経済的貧困・負債(2) 孤独・群衆, 別離(帰国)
		個人的 葛藤 哀しみ・死(2), 青春の暗鬱 絶望・虚無, 精神の漂白
ニュートラルな主題	47%(14)	心象 風景 追憶・時の流れ(3), 生活(2) わびしさ・虚無(2), 幽玄(1)
		風景 写真 森林(3), 川, 道, 田舎

※は30作品中の割合、()内は該当数

表4 陰影景観の基本タイプと現代詩の主題

	光どり	影どり	陰	鏡映り	各 計
ポジティブな主題	1	3	2	2	8(27%)
ネガティブな主題	0	6	2	0	8(27%)
ニュートラルな主題	3	4	3	4	14(47%)
各 計	4(13%)	13(43%)	7(23%)	6(20%)	30

これを見ると、陰影表現に関連する詩の傾向は、写実的でニュートラルな主題が非常に多く、どの基本タイプも該当していることがわかる。このような詩人の自己想念の写実には、心理療法の箱庭創作や風景描画によるイメージ想起による精神安定の実践的な心理行為が観察できる。

また、ポジティブなテーマには、社会との葛藤や不安などコンプレックスに近い心理が陰影表現の中に投影されており、基本タイプの「影どり」と「陰」に表現されやすいことがわかる。比較的明るい光の場所で生じる「光どり」と「鏡映り」は、ニュートラルな主題とポジティブな主題に傾向する。

②季節・時間・気候

季節・時間・気候に関して特定できるものの頻度を表5に示した。

対象現代詩では、影が視覚現象として明瞭な輪郭を見せる夏のシーンは抽出されず、冬が最も多く30%を占める。また、時刻は夕暮れが多く、気象の中で曇りも見られることから、輪郭のはっきりしない弱い陰影の存在がわかる。このことから、冬の弱い太陽によってできる弱く柔らかい陰影が、現代詩の日本的な陰影の心象空間として表現されやすい傾向があると考えられる。

表5 季節・時間・天候の出現割合

季節	①「冬」	9 シーン (30%)
	②「春」	6 シーン (20%)
	③「秋」	4 シーン (13%)
	④「夏」	0 シーン (0%)
時間	①「夕暮」	16 シーン (53%)
	②「夜」	3 シーン (10%)
	③「昼」	3 シーン (10%)
	④「朝」	1 シーン (3%)
天候	①「曇り」	3 シーン (10%)
	②「雨」	1 シーン (3%)

※は30作品中の割合

(3) 陰影景観の主体とスクリーン

陰影景観の構成要素である主体とスクリーンについて、対象詩の言葉の頻度を整理した結果を表6、表7に示した。初めに主体とスクリーンの全体的な傾向として、山や河川などの地形や植物に関する自然系景観要素の頻度が非常に高いことわかる。また、スクリーンと比較して、主体では人工系の要素がやや高くなっている。以下に、主体とスクリーンの特徴について述べる。

表6 現代詩に現れる陰影景観の主体

自然系 50%(15)	地形 20% (6)	山(2), 森, 林, 河川, 地面
	気象 7% (2)	雪, 星
	植物 17% (5)	花(3), 樹木, 世の葉
	動物 7% (2)	馬, 鳥
人工系 37%(11)	建物 20% (6)	建築(2), 倉(2), 小屋, 白壁
	人間 17% (5)	人(4), 仏

※は30作品中の割合、()内は該当数

表7 現代詩に現れる陰影景観のスクリーン

自然系 57%(17)	地形 37%(11)	道・地面(5), 山(2), 林谷, 荒野, 雪
	水面 17% (5)	川面(3), 渚, 泉
	植物 3% (1)	花
人工系 20% (6)	生活 17% (5) 装飾	障子, 戸棚, ガラス, 置き写真 陶器, 改札口
	人間 3% (1)	瞳

※は30作品中の割合、()内は該当数

①主体の特徴(表6参照)

i)自然系主体の特徴

自然系の主体は、1.自然地形のように比較的動きの少ないまとまった大きな陰影を作る大規模固定型、2.雪や星のような気象現象に伴う離散的でまばらな陰影を作る動的離散型、3.花や葉のようにきめ細やかな輪郭を持ち風などによって常に微小な変化を示す陰影を作る微小変化型、4.動物などのスクリーンを大きく横切るような速い動きの陰影を作る動的連続型の4つの主体が抽出された。テーマとの関連性をみると、地形と植物が主体の場合、*ポジティブ*な写実的なテーマが該当し、気象系の主体も*ポジティブ*なテーマに傾向する。このことから、自然系主体は比較的*ポジティブ*で明瞭な心象風景の表現に結びつきやすいことがわかる。

ii)人工系主体の特徴

人工系の主体は、建築物のような固定され変化が少なく連続した陰影を作る固定連続型と、人間のようないくつとした動きの影を作る静的変化型の主体が抽出された。人間が陰影主体となる場合の詩のテーマは、生活の中の貧しさや寂寥といった*ネガティブ*なテーマが該当している。また、建物も同じ傾向があるが、やや*ニュートラル*な心象風景描写に偏っている。また、建築物では、倉庫や小屋など日常生活の中心である家屋から少し離れた周辺部の仮想的な要素に傾向していることがわかる。これらは幼少期などの追憶描写の中で、目立たないけれども非日常的な隠れ場所周辺の陰影を作り、静的で連続性のあることが特徴となっている。

②スクリーンの特徴(表7参照)

i)自然系スクリーンの特徴

抽出された自然系スクリーンは、1.固定されておりテクスチャ面の変化が少ない地形のスクリーン、2.テクスチャ面の時間的な変化の激しい水面のスクリーン、また一例ではあるが、3.花びらのように本来陰影主体として存在する小規模な植物スクリーンの3つが抽出された。地形のスクリーンは、道・地面のような人間の歩行視点に伴うスケールと、山林や谷のように眺望点の視界から広がる大規模スケールのものが多く該当した。また、道や地面のような目下より下の視線のスクリーンは*ネガティブ*なテーマに傾向している。水面のスクリーンの基本タイプは

鏡映りであり、表現されるテーマは写実的もしくは*ポジティブ*なものに傾向している。

ii)人工系スクリーンの特徴

人工系のスクリーンは、ガラス、陶器など身近な生活用品の中でテクスチャや色彩の多様なオブジェ型のスクリーンが抽出された。これらは被写面が小さく、移動可能であることが特徴である。また該当した多くが写実的な心象風景のテーマに関連した。

③動的な主体とスクリーンの組合せ

主体とスクリーンの組合せの中で、相互の動きが顕著であり動きの違ったものを組み合わせることによって、動的な陰影変化を強調する対象が抽出された。例えば、花と泉、星と瞳、笹の葉と花の組合せが該当し、これらは恋愛や青春感情などの*ポジティブ*なテーマを表現した。

5. 結 論

本研究では、日本的な陰影景観の固有性を把握するために、景観論的な視点から陰影景観を定義し、評論や現代詩の景観表現から陰影空間のサンプルを抽出し、その構成要素や心象について記述した。以下に主な結論をまとめる。

(1)光源、主体、スクリーン、陰影、視点場の5つの要素によって構成される陰影景観の構成把握モデルを提示した。また、陰影景観の4つの基本類型として、光どり、影どり、陰(蔭)、鏡映りを設定した。

(2)(1)の景観論的な視点から、「陰翳礼讃」を整理することによって、7つの日本的な陰影空間(薄明りの安寧、朦朧たる隈、柔弱な光の軌跡、陰の中のゆらめき、金箔地の照明、床うつり、隠しと強調)を抽出することができた。

(3)現代詩に表現された陰影の典型は、柔弱な光による輪郭の不明瞭な弱い陰影であった。特に、「影どり」や「陰」のタイプで表現される暗鬱で輪郭の不明瞭な陰影表現には、詩人の*ネガティブ*な心象が反映される傾向が見られた。これらは日本の気候的風土に依存すると考えられる。

(4)現代詩に表現された陰影景観の主体とスクリーンは、自然景観要素が多く該当した。また、個々に次のような要素が抽出された。

i)自然系の主体は、大規模固定型(自然地形)、動

的離散型（気象現象）、微小変化型（植物）、動的連続型（動物）が抽出され、'ポジティブ'で明瞭な心象風景の表現と関連した。

ii)人工系の主体は、固定連続型（建築物）と静的変化型（人）が抽出された。前者は生活系の周縁部にある主体であり、非日常的な隠れ場所周辺の陰影を作り、静的で連続性がある。

iii)自然系のスクリーンは、テクスチャ固定型の地形スクリーンと変化型の水系スクリーンが抽出された。

iv)人工系のスクリーンは、多様な色彩やテクスチャを持ち、被写面が小さく移動可能なオブジェ型が抽出された。

v)動的な主体とスクリーンの組合せによって陰影変化を強調する型が抽出された。

本研究で述べた陰影景観が想定するデザインは、特に照明デザインや構造物のテクスチャデザインである。以上の結論を通じて、都市のデザインの中で、積極的に陰影を演出するためのコンセプトを考える際に、主体の選択に関しては、アール・ヌーボーのような有機的な変化を伝える主体や、雪や雨のような離散的で変化の多様な主体、建築物やストリートファニチャーなどで無機的なモチーフを伝える連続的な幾何学模様を持つ主体を想定することが考えられる。また、スクリーンの選択では、積極的に明るい装飾イメージを表現する場合には反射的素材を用いたり、日本的な情緒性を表現する場合には吸収的素材を用いるなどテクスチャ素材の選択が大きく影響すると考えられる。また、大きな風景を小さなスクリーンに閉じ込めてしまうといったスケールの逆転による演出やオブジェ型のスクリーンの設置など、地になりやすいスクリーンを図的に演出するデザインが考えられる。



写-9 有機的な主体



写-10 幾何学的な主体

最後に、今後の課題について、より多くの言語的メディアの表現に関する分析を行うと共に、ビジュ

アルな側面からの陰影景観の分析が必要になる。例えば、気候風土に差異のある日本と西欧の実際の陰影景観を対象としたイメージ比較を行うことによって固有性を把握することが推察される。

謝辞：本研究の遂行にあたり終始貴重なご教授を頂いた京都大学工学部佐佐木 綱教授、研究動機をご示唆頂いた運輸省港湾技術研究所斉藤潮氏、資料整理等にご協力頂いた京都大学大学院梶谷拓生氏に感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 日本建築学会編；建築設計資料集成・環境1, p. 51-88, 1978.
- 2) 土木工学体系編集委員会；土木工学体系13景観論, pp. 253-269, 彰 国社, 1977.
- 3) 河合隼雄；コッフレックス, 岩波新書
- 4) 樋口和彦；心の構造, 現代のエクsp'リNo. 134, 至文堂
- 5) 地域計画第54回関西地区大学合同セミナーテキスト；地域計画と風土分析, pp. 16-18, 1985.
- 6) 佐佐木綱；女らしさ・男らしさー計画の視点よりー, pp. 158-160, 淡交社, 1989.
- 7) 中村良夫・平田昌紀；河川景観のアクセス性の表現に関する研究, 第34回 土木学会全国大会年次学術講演概要集, 1979.
- 8) 篠原修；土木景観計画, 新体系土木工学59, PP. 28, 技報堂出版, 1982.
- 9) 日本大辞典刊行会；日本国語大辞典, 小学館, 1975.
- 10) 宮川英二；風土と建築, 彰国社, 1979.
- 11) 谷崎潤一郎随筆集「陰翳礼讃」pp. 173-221, 岩波文庫, 1985.
- 12) 伊藤信吉；現代詩の鑑賞（上・下）, 新潮文庫, 1954.
- 13) 樋口忠彦；日本の景観, pp. 237-241, 春秋社, 1981.
- 14) 小長井由隆・川崎雅史；輪郭線のラフスケッチによる街路景観の基礎的評価, 都市計画論文集 No. 24, pp. 445-450, 1989.
- 15) 建築知識, VOL. 22, No. 263, PP. 34-96, 1980.